ばらを語る（4・11・21）

伊藤克三（昭14・理乙）

ご紹介に預かりました伊藤でございます。こういう席で、ばらというようなあまり教養に役立たないような話をさせてもらうのは、ちょっと気が引けましたんですけれどね。実は、私の家内の祖父が三高出身でございまして、田舎の蔵を整理していましたら、その人の三高時代、（と言いましてもまだ京都へ来る前の大阪中学校という時のと、それに続き第三高等中学校）の修了証書が出てまいりまして、それをここへ持って来ましたら、井垣さんが「ああ、これは結構なものですね。」ということで保管していただくことになりました。その時、序に私のばら作りの話をしていましたら、それなら喋ってくれないかということで、こうして今日お話させて頂くようなことになったんです。

今ご紹介頂きましたように、私のばら作りは昭和二十七年に始まります。大阪の阪急百貨店でばら展をやっておりますところをたまたま通りかかりまして、戦争中からその後にかけてできた

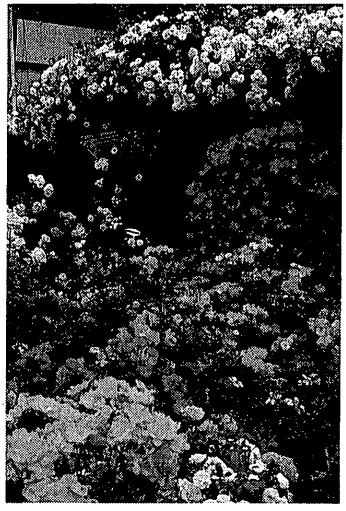
ものすごくいいばらをはじめて目にしました。ばらってこんなにすごいものかとばらの花に一目惚れいたしまして、その場でばら会に入りました。早速苗木三本を買ったのが始まりでございます。その頃、やはり新種の苗は高うございまして、私の給料ではなかなか買えなかったのですけれども、ちょうど学会への出張旅費がポケットにあったものですから、それで買ってばら会に入会したというのが、病みつきの始めです。

それから四十年余り経ちますが、その間、どちらが本職かと言われたら、ちょっと言いづらい程ばらに凝ってしまっている次第でございます。

私、三年前に本職がなくなりました時も、ばらがあるから大丈夫だと思っておりましたところ、やっぱりそのショックからか、うつ病になりまして、自殺しようかと思ったことがあったんです。高槻の大阪医大の精神科へ行きましたが薬がなかなか合わず、入院直前に頂いた薬がてき面に効きまして、幸、入院せずに済んだわけでございます。それからずっと回復して今日に至っております。しかし、その時に体力の限界を考え、思い切って垣根その他のつるばらを全部切り倒してしまいました。今日お見せしますスライドには、垣根やテラスの上など、つるばらも盛んな頃の庭の様子が写っておりますが、それらは一番盛りの時のもので、只今はございませんのでお含み願います。つるばらが無くなって春は淋しいですが、その代り、秋には繁ったつるばらで庭が乱されずに花を充分に鑑賞して頂けるようになりました。

今日の私の主眼は、花の綺麗なところを見て頂いて、それの説明と言いますか、自分なりの解釈を申し上げたいのが本意でございます。しかし、話を神陵文庫に書かないといけませんので、文字で書けるような所もちょっとはないと困ります。それで一通りお手許の要項に書いてありますようなことを喋らせて頂いて責を果しまして、あとはスライドでばらの花を楽しんで頂こうというつもりでございます。

先ず、私のばら歴です。日本ばら会に入って間もなく、その京都部会というのに誘われて入会し、ここが私の当初のばら作りの活動の場となりました。昭和四十四年からは十余年間、その責任者としてばら展のお世話などをしてまいりました。



① 門よりテラスを見る

その頃はばら熱が非常に高く、高島屋さんで春秋ばら展を盛大にやってもらいました。しかも、高島屋に飯田さんという常務の方が支店長の上にいらっしゃいましたが、その方が非常にばらのお好きな方でしたので、こちらが会場にいろいろと気を使いましても、「いやあ、あなた方の好きなように楽しんでもらえればよろし

いわ。」と、こんな調子でやらせてもらいましたので、大変ありがたく、当時の楽しかった思いはいつまでも忘れることができません。

昭和何年頃まででですかね。五十四、五年頃まででしょうか、ずっと高島屋でやっておりましたが、その飯田さんが亡くなられた頃には、世間のばら熱は下っていましたため、途端にばら展が無くなり、惜しい思いをしました。その頃は、何と言いますか、百貨店もそんな余裕はなく、非常にせちがらくなりまして、あれだけの床面積だと売り上げがどうのこうの、という話を聞かされました。盛んな頃は、大阪高島屋、阪急、京都高島屋、それに京都大丸とか、藤井大丸とかあっちこっちでばら展を取り合ってやっていたわけです。このように、ばらには一時ものすごいブームがあったんですけれども、昭和五十年頃よりブームも去り、だんだんとばら展もなくなってしまいまして、今は日本ばら会関西支部が細々と、と言うたら悪いんですけど、梅田の阪急でやっているだけです。

また、その間、私は朝日ばら協会の理事として、会の運営、会誌「ばら」の編集を十余年担当したり、日本ばら会の理事も何年かやりましたが、只今は地元高槻で高槻ばら会を作り、専らこの方のお世話をしています。会員も増加して結構楽しんでいます。

その次は、日本でのばら会の変遷の話になります。戦前の昭和二年、関西でのばら界の重鎮でありました岡本勘治郎さん、並河功先生の手によって大日本薔薇協会が京都に作られたのが最初

です。その後昭和七年、東京に帝国ばら協会が生れて、互に張り合っていたと聞いています。戦後は昭和二十三年、帝国ばら協会の系列で日本ばら会が東京で発足し、これが今日まで引きつがれて、現在日本での唯一の全国組織のばら会となっています。

日本ばら会は、当初は吉田茂さん、茅誠司さんといったばら好きの名士の方々を会長にして、昭和五十年頃までは非常に盛り上った活動をしていましたが、今日では会員数も知られたくない程に減ってしまい、本部では再建に躍起になっています。

② ビルゴ

関西では、昭和三十年に、大日本薔薇協会の復活という形で朝日バラ協会が、朝日新聞社、高島屋、京阪電車の三社の後援で創られ、その研究ばら園として作られたものがひらかた公園内のばら園です。各社千人づつを集めて、会員数約三千人でスタートし、三社の力強い後援で、一時は日本ばら会と張り合う全国組織のばら会でした。当初は朝日新聞社の宣伝部の中に本部が置かれていまして、私もそこへ何度か行ったことがあります。それも昭和五十年頃以降、だんだん寂れてまいりまして、遂に昭和六十一年三月に潰れてしまいまし

た。

それまで十数年の間、ずうっと会の世話をしておりました私としましては、その残党の方々が気の毒ですので、どうしようかと考えた結果、高槻に小さいながら高槻ばら会というものを作り、そうした方たちの拠り所として頂きました。それから八年、メンバーも次第に変わり、現在は近畿一円から七、八十人の会員が集まって、高槻ばら会は関西では一番賑やかな会になっています。

次にばら栽培の盛衰と言いますと、ほぼばら会の盛衰と並行していると考えて頂けばよいと思います。私がばら栽培をはじめました昭和二十七年頃の阪急百貨店のばら展会場と言いますと、旧館の殆んど、七階の床面積の半分位がばら展でしたから、それはものすごいものでした。

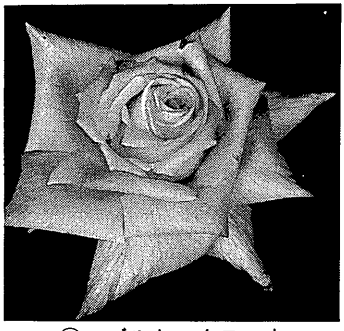
それがずうっと何年か続いておりましたけれど、それも昭和四十五年あたりからだんだん人気が衰えてまいりました。と言いますのは、遊びがいろんな事で増えて来ましたのと、土地の価格が上って、ばらを作る土地が無くなってきたというのが、都会の近郊でのばら作りの衰退につながるんだと思います。今、地方へまいりますと、九州あたり、或は関東でも北の方へ行きますと、割会に盛んなんですけどね。だから一番さびれているのが近畿じゃないかなと思います。

でも、私はまだばら作りの現役でずっとやるつもりでおります。もういい加減に第一線を去って、気楽なばら作りを、という事を思わぬでもないんですけれど、人にばらの話を何やかと講釈したり、或は、ばら展で審査をし、講評でもしようと思いますと、展示して恥ずかしくない、人

に負けぬだけの花は咲かせていないと、と思ってずうっと現役のつもりでおります。私、現役を止めたら審査員も止めようかと思っております。

戦後のばらと言いますと、昭和二十四年の横浜での日本貿易博の時に、アメリカから戦中戦後の新しいばらが三十本空輸されて来たときに始まります。どれも花の大きさ、色彩とも見事なものでしたが、その中にピースという種類がありました。それが非常に注目を浴びまして、それが契機となってばらブームが始まったと言ってよさそうでございます。

次いで昭和二十六年に、サンフランシスコの講和会議の会場の向い側のビルで、大きなばら展をやったそうですね。ピースとローズ・オブ・フリーダムという二品種を飾って、大いに講和を祝福したということです。そしてそのあと、十月に開かれた日本ばら会の秋のばら展会場に、サンフランシスコばら会からピースとローズ・オブ・フリーダムなどのばらが送られてきて大きな話題となり、この時の入場者は三日間で五万人だったそうです。戦後のばらは、戦前のばらに比べ、格段の進歩を遂げていたわけであります。



③　ゴルト・クローネ

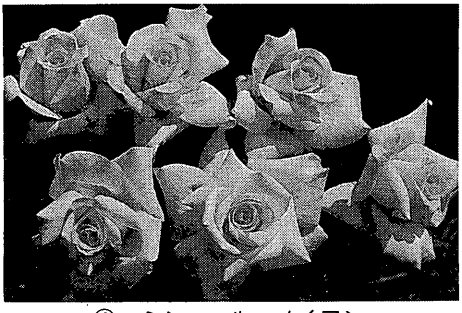
ピースは、フランシス・メイアンというフランスの育種家が一九四五年に作出したということになっておりますけれども、

本当はもっと早く、戦争中に作り出したものであります。それを、戦争でなくさないように、あちらこちらに持ちまわりまして、維持管理に気を使ったようでございます。それが戦後発表されますと、爆発的な人気を博して、世界中に広がって行ったわけであります。当初はマダム・A・メイアンその他の名で呼ばれていましたのが、平和回復を機にピースという名に改められたのです。今見れば大した花でもないし、作る気はしないんですが、やっぱり何と言っても、新しい時代を開いた功労者ですからね。今も庭に大切に残してはおります。そのピースが出まして、それを親としていろいろすぐれた品種が生まれました。今日作られておりますばらの殆んどにピースの血が入っている筈でございます。青ばらにしても、朱色のばらにしても、親をずうっとたどって行きますと、どこかにピースの血が入っておりますので、ピースと言いますと、現代ばらの親と考えていいわけです。これから今日の四季咲大輪種（HT）が出て来ているといっても過言ではありません。

次にばらの故郷のことなんですが、本によりますと、故郷はヒマラヤだそうですね。ヒマラヤがばらの原産地でございまして、そのうち西へ広がって行ったものと、東へ広がったものとがあり、西へ行ったものは乾燥に強い原種でして、湿気を好む品種が東へ参りまして、それが中国、日本のばらだということです。

ちょっと本を見てもらいましたら、どこでも書いてあるかと思いますけれども、今でもヨーロ

ッパ、中近東で作られております「ガリカ」とか「ムスク」とか「ダマスク」とか「カニナ」とか、こういうようなものが、今の西へ行った典型的なものでございます。これは大体ピンクか白の単弁のものが多いのですが、匂いがいいんですね。だから昔の人は、ばらは見るというよりも、匂いを嗅ぐということ、それともう一つは、薬用に使うために栽培されたようでございます。



④　ミシェール・メイアン

東の方、中国へ来ましたものでは、庚申バラというのが最もよく知られています。庚申バラは、日本にも平安時代から入っておりまして、屏風絵なんかにも画かれております。月季花とも言われ、最大の特色は四季咲性であることで、今日の四季咲ばらの元になっているものです。ロサ・キネンシスと言っていますね。玫瑰（マイカイ）はロサ・ルゴサと言われ、日本にありますはまなすの類です。ロサ・バンクシュア、これは日本で木香バラと言われるもので、今度紀子さんか、真子さんかの御印になったばらですね。それからロサ・レビガータ、日本ではナニワバラと称するものです。原種で、私もこれなら作ってもいいなあと思うのがナニワバラですね。あとで写真をお見せしますが、綺麗なばらです。日本には在来の野いばら、はまなす、それに変っ

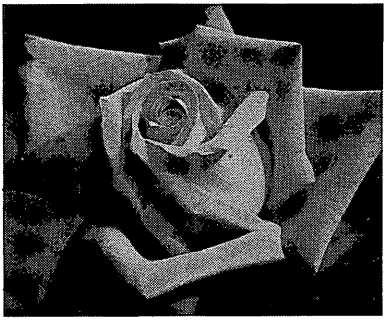
たものとして山椒バラという、つるではなしに木になるばらがあるんです。箱根の山の方にありまして箱根の旅館の庭には大きな山椒バラがあるようです。私も裏の隅に一本置いていますが、見たところ全く山椒の木でしてね。春、ばらを訪ねて来られる方々に「ああ、山椒の木にこんな花が咲くのですか」と言ってもらえるのが面白いのです。全く山椒と同じ葉っぱで、幹の皮も剝がれますしね。ただ匂いの点では山椒の匂いはありません。こういうものが日本にはございます。

こうした原種が基にありまして、現代ばらが出来てきたわけですけれども、その中で、一番現代ばらに大きな役割を果たしておりますのが、庚申バラであります。あるいは長春とも言われます。庚申の日は六十日毎に来ますので、六十日毎に花をつけるということで全く四季咲きのばらなんです。西洋にもどこにもこういう四季咲きというのはないわけです。これをいろんな種類に交配いたしましたために、今日ばらと言えば、つるばらは別ですけれど、普通のばらはすべて四季咲きでございます。春から初冬までこれ程年中楽しめる花は他にはないと思いますね。その代り、年中世話の手が抜けないということでございます。

ばらの栽培ということを言い出しますと、ばらの権威者として知られた岡本勘治郎さんという方、この方は枚方のばら園を造る時に主になった方ですが、その人とか、並河功先生、この方は京大農学部の学部長のあと、大阪府大の学長をされ、長年朝日ばら協会の理事長をなさっておられた方ですが、そういった方々に言わせますと、日本程ばら栽培に向かない気候はないというこ

とでございます。特に非常に高温多湿な地域では、虫害はともかく、病気が常に発生しますので、大体十日か半月毎に消毒するということを、四月から十一月、十二月まで繰り返さなければなりません。日本でばらを作るのは馬鹿だとまでいう人もある位です。

人とばらとの関わりにつきましては、去年ですか、藤本優さんという方が〝『花の女王』との出会い〟というばらの文化史をまとめた本を出版されました。この方は、京大文学部史学科を出て、長年尼崎の高校の先生をされていた方です。その方が、これまで三十年程ばらにとりつかれ、ばら作りの他、歴史家さんだけに、ばらと人との関わり合いの歴史を、ずうっと調べて来られたものが、本としてまとめられたものです。詳しいことは、そんな書物を見てもらえば分かって頂けますが、古くはメソポタミアからギリシャの頃より、ばらは非常に珍重されておりまして、その頃は、どちらかと言うと、花を見るよりも、その香りが愛でられました。花は、勝利者の花冠その他いろんな飾りの材料として使われていたようです。



⑤　レッド・ライオン

それがだんだん西の方に伝わっていきます。イタリア半島にはばらの原生種はなく、紀元前三世紀頃に伝えられています。

イギリスにも、もともとばらはなくて、栽培されるようになったのは十二世紀頃からだそうです。今日、イギリスでは、ご存知の通りばらが国花となっているため、イギリスがばらの本場のようにも思われますけれど、本来はなかった所です。イギリスで作り出されたばらは、概して日本の気候では作りにくいんです。

これまでのばらの改良は、多くの人々のたゆまぬ努力の賜物でありますが、その中でも、私たちが近代ばら誕生の最大の恩人と思いますのは、ジョセフィーヌですね。ナポレオンのお妃ですが、この方が非常にばら好きでありまして、ナポレオンが遠征に行って、帰って来る時には、必ずそこのばらを持って帰って来るということで、世界中のばらを集めてこれをマルメゾンの宮殿に植えて、ばら園を作りました。集めた品種は二百九十種類に及び、その中には、中国のばらも、日本のばらも入っていたようでございます。一八〇四年から一八一四年までのことですが、彼女は単に集めるだけではなくて、専門の造園技師を招いて、本格的なばら園とするとともに、周囲に植物学者、園芸家を集め、育種、交配の研究と実験をさせました。一八一四年ナポレオンは敗れ、ジョセフィーヌも続いて病没いたしましたが、今日のばらの育種の原点となったのが、このマルメゾンのばら園でございます。今も庭園はあるようですけれど、ばらはもうないということを聞いています。こうしてばらの交配育種による新しい品種の作出が本格的にはじめられ、これがその次にあります現代ばらの系譜というところにつながるわけです。なお、ジョセフィーヌと

ともに忘れられない人物にピエール・ジョセフ・ルドーテがいます。招かれてマルメゾンのばら園のばらの絵を精密な写実的描写でえがき、これはルドーテのばらとして有名なものです。先年日本でこれの復刻版が出版されました。

今日主に栽培されておりますのは、HTすなわちハイブリッド・ティーという大輪四季咲種と、FLすなわちフロリバンダという中輪四季咲きの房咲き種があります。それとミニばらという小さい一～二センチのばらがあり、これも完全な四季咲き性のばらです。これらはすべて叢生種で、咲きがらを切ったあと出る芽には、必ず蕾をつけ、春から初冬まで花を咲かせます。これらの他に、いろんな種類のつるばらがあります。つるばらというのは、本来一季咲きでございます。春咲いた後の新梢には蕾をつけず、伸びるばかりで、初冬までに何メートルにも伸びます。それを冬の間に横に寝かせますと、葉っぱの付け根の所から全部花がたちますから、春は葉っぱをかくしてしまう程豪華なものですけれど、それは十日ばかりで、あとは乱れて乱れて仕方がないものです。その上高く四～五メートル位も伸びますから、上の方が病気にかかれば、

⑥　シルバー・ライニング

病気の葉が風で散って、ばら庭全体に蔓延してしまいます。つるばらは病気の根源になりますから、いい加減につるばらは止めようと、私も何度も考えながらも、春の花の豪華さが頭の中に残っていますと、なかなか切るに切れず、自分が病気をして、漸く思い切れたというところでございます。四十年も付き合った木ですから、ばらとも思えぬ大きな株もありましたので、今から思えば、株だけでも記念品として取っておけばよかったと、残念に思っております。切られる時には、別れの盃でお酒をかけてやりました。

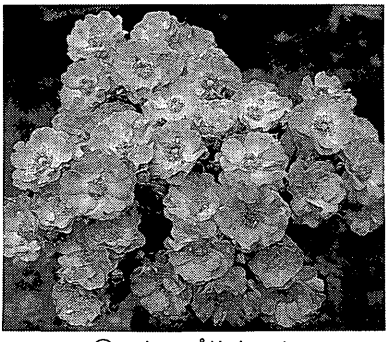
今の大輪の四季咲きのＨＴというものが生まれますまでには、その途中に、ブルボン、ハイブリッド・チャイナ、ハイブリッド・パーペチュアルなどいろんな系統のばらが生まれ、それらの中には、今日もなお栽培されているものがあります。これらが親となって、一八六七年、ＨＴの第一号、ラ・フランスが生まれました。これが近代のばらのはじまりです。ですから四季咲ばらの歴史は、まだ百二十年余りということになります。今日、私の持って来ましたのも、大輪種は全部ＨＴ種でございます。

これらのＨＴと日本の野ばらとの交配から作られたものがフロリバンダ種であります。日本の野ばらの強い房咲性が導入されて作られた四季咲きの中輪房咲き種でして、多花性のため、公園などによく使われています。

今日よく鉢植で出ておりますミニばらというのがありますが、これは、やはり中国に、キネン

シス・ミニマという矮性の原種がありまして、それを基に、いろいろ交配して出て来ておりますのが、このミニばらでございます。この頃、植える場所のない人たちが、ばら栽培をしようとすれば、ベランダでのミニばらしかありませんので、よく売れているようです。

次には、花色の展開ということです。四季咲き、大輪のHTがはじめて出来ましてから百二十年余りということですが、その初期の頃には、白かピンクか赤か、そんな色のばらしかなかったわけです。そうしたHTの中に、始めて黄色が入りましたのは、ようやく一九〇〇年、ソレイユドールによるものです。その後も、私がばらをやり始めた一九五二年頃のばらには今日のような豊富な色は見られませんでした。その頃は、朱色のばらを、ということで、いろんな品種が出ておりました。私の記憶に残っております当時のばらとしましては、ラダール、モンテズマ、アズティックなどありますが、いずれもまだ朱の色が濁っていました。朱色の完成は、一九六〇年のスーパー・スターによって成し遂げられました。ドイツのタンタウという人が作り出したもので、世界至る所の新種ばらのコンクールで金賞を総なめいたしました。色は勿論、花もちもよく、耐病性にもすぐれ、切花品



⑦　キャプリオール

種としても、当時ものすごい売れ行きを示したのであります。タンタウはこれによって一躍してトップクラスの育種家になったのであります。

今後に大きく残されているものはと言いますと、それはブルーのばらなんです。ブルーの空のような綺麗な、本当の青ばらが出来ればということで、皆さんそれぞれやっているわけです。今日は、バイオテクニックを使って、サントリーの工場あたりでもやり始めているようでございます。本当に出来るのでしょうか。今のところは、余り期待は出来ないと思います。現在青ばらと言われているものは、青紫のもので、一九五四年頃から、プレリュード、スターリング・シルバー、レディーX、ブルー・ムーンなど、次次に出てまいりましたが、本当の青ばらということが出来ません。大体がグレーパールという灰色のばらから来ているようです。これらとは違った方向で、育種している途中で出来たものが、ここにも持ってまいりました紅茶色のばら、ブラック・ティーです。今の赤ばらは、改良されてこのようなことは殆んどなくなりましたが、古い赤ばらは、気候によってはブルーイングと言いまして、青味を帯びた醜い赤紫になり、大変嫌われました。しかし逆にこのブルーイングを追求していけば、青ばらが出来ないかと、枚方園芸で交配を繰返している途中で出たのが、茶色の珍しい色のばらです。これが日本で出来たと思うと面白いものですね。それから二、三年のうちに、外国からもこのような色のばらが沢山出て来ました。これが出ました頃ですが、四条の高島屋でのばら展の時女性の方が手を触れて、鞣皮で造ら

れているのかと、確かめておられましたのを記憶しております。それだけはじめは珍しい色だったという話です。結局、枚方からは、いい青系のばらは出されていません。これまでいろいろな青ばらと言われるものを見て来て、私のいいなと思いますのは、一九六四年に出ましたブルー・ムーンです。これはタンタウの作ですが、彼は、さきに朱色のスーパー・スターを作ったドイツの人で、現在これほどすぐれたばらの育種家はないのではないかと思っています。ブルー・ムーンは香りもよろしいし、色も青に近いですね。伊丹ばら園で作られたマダムビオレというのは、作り易く、色もまあまあのばらですが、香りが全くないのが残念です。大体青系のばらには、香りのいいのが多いので、余計気になります。

⑧ 銀座小町

ばらの花というものは、そう強く匂わなくても、どこか香るのですが。とは申しましても、ああ、いい匂いがする、と香りに惹かれるようなばらはそう多くはありません。花の形と色ばかりを追って、匂いを犠牲にして来ました結果です。私の庭には、二百種類ぐらいはありましても、強く匂うのは七、八種ぐらいしかありません。今日は生憎ここにある花の中には、こうした品種がなくて残念です。私はうつ病のあと

鼻が効かなくなり淋しい思いをしています。ばらの場合も「これは香りのいい花の筈ですよ」と言って、人に匂ってもらうこの頃でありまして、私にとってばらの香りは、記憶の中に残っているだけなんです。ばらの香りに関しましては、人に説明がしにくいんです。

これで一応、現在のばらの概要の話を終らせていただき、これから私のばら作りを紹介させていただきます。なぜこんなにばらに一生懸命凝るようになったのかと言われますと、直接的には、やっぱり美しいばらの花を観賞したいため、ということになりましょう。決してばらの花が咲けばいいというのではないのです。本当に、自分でぞっこん惚れ込めるような花を咲かせたいということなんです。けれども、庭で折角よく咲いたばらも、そのまま庭におけば、何時間かの命、やがて形が崩れてしまいます。短かいばらの命、自分が楽しむだけでは勿体ないし、ばらにもかわいそうに思われ、ばら展に持って行くようになりました。多くの方々の目を楽しませることもできますし、同好の人々との交流もできます。そのうち入賞するようになり、庭に咲いた花が、ばら展会場の中央壇上に飾られるようになりますと、決して悪い気はいたしません。はじめの頃は、予期以上の花が咲けば、朝これに鋏を入れる手が震える思いがしたものです。たくさんカップが並ぶ頃になりますと、だんだん家の庭を訪ねて来られるお客さんが増えてまいりました。高槻市の広報が大きく取り上げたり、そのうち四大新聞が、毎春写真入りで記事に出してくれるようになりまして、ますます来訪者は増し、春はわざわざ展覧会へ花を持って行かなくても、庭で

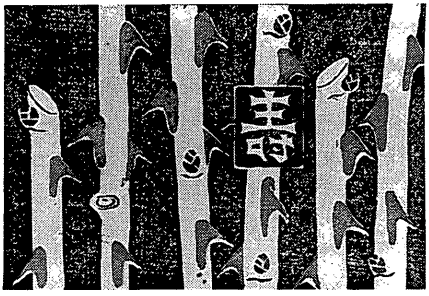
現物を大勢の方々に見てもらえるようになりました。つるばらのあった頃はよくテレビがまいりまして、これが放映されますと、途端に来訪者が増えたものでした。このような次第で、春には展覧会に行かないことにしています。とは申しましても、ばら展の出品をすっかり止めたということになりますと、栽培意欲を削がれると言いますか、頑張って良いのを咲かそうという目標が薄れ、気力が弱まって、花の品質は自ら低下することになります。時時は、元気でいますよ、という所を見せたいというのが正直なところ、主として秋には出品を続けています。人の花を審査して、何か批評でもしようといたしますと、やはりそこそこ、それ相応の花を咲かせる実績を示しませんと、恥かしい思いをしますから。

⑨　ナニワバラ

よく咲いた花を楽しもうとはじめたばら作りですが、よく考えてみると、まことにはかないんです。すばらしく咲いたといっても、何時間かが経てば、形が崩れてしまいます。残せるものは何かと言えば、写真位です。しかし写真も、普通の写真では、本当の姿を残すことはできません。ぞっこん惚

れ込めるほどに咲いたばらを、写真に撮ろうと、ファインダーを通して見るでしょう。その時には、ばらを片目で見ているんですね。ですから、両眼で見てすばらしかった花も、ファインダーを通して見ると、格段に低下して見えます。これが写った写真ですから、一応の花では見られる写真にはなりません。あとでスライドで見てもらう写真もそうですが、写真で、ああ、よく咲いていると見える写真のモデルである現物の花は、ものすごく良く咲いているということです。一枚の写真では、決して本当のばらの姿を残すことはできるものではありません。このことをお含みの上でご覧願いたいと思います。一人で見るのでしたら、ステレオ写真に撮ればよいと思います。見る顔の位置を決めれば、頭をそのままにして左右それぞれの眼の位置にカメラのファインダーをもって来て、二枚の写真を撮り、これをステレオビューアを通して両眼で見ますと、そのままものすごい迫力をもって再現されますから。しかし沢山の人に同時に見てもらおうとしますと、スライドによるしかありません。そうなると、余程よく咲かないと見て頂けるような写真にはなりません。花作りは、こういうように、記録にも残せないはかないものなんです。例えば、俳句を作ったり、絵を描いたりすれば、作品が残りますが、ばらで残るものと言えば、カップ位なものでしょうか。或は駄文を残す位でしょうか。このままでは淋しいから、何か他に残せるものはと思いつくところは、自分が交配して、新種を作ることですが、なかなかいいものができるものではありません。そんなに簡単によいものが出るのなら、育種家では食べて行かれません。

育種家は、何十万粒も種を蒔いて、その中から数本をピックアップするわけです。ばらは面白いもので、種を蒔いたら、十センチ余り伸びると蕾をつけて、バージンフラワーを咲かせます。そこで第一次の選別をして、見込みのないものを抜きます。それを繰り返し、最後に残った。これはというものを、接木して一人前に育てて、良ければ売り出そうかということになるわけです。一つの品種を市場に出すには、数年の歳月がかかります。なかなかアマチュアにはむずかしいことですが、この頃は結構アマチュアも新種を出していますし、アマチュアの品種も沢山市場に出ております。また入賞しているものも少くありません。



⑩　年賀状－Ⅰ

ばらのいい品種というのは何かと言いますと、花の大きさ、色、形、匂いは勿論、茎、葉とのバランスも大切です。その上、花数も多く、雨にも強い。そして樹形は整い、成育がよく、病気にも強くて作り易いなど、欲を言えばきりがありません。こうしたいろんな条件を考えて、まず花がよくて、大して作り難くないものを、皆さんに楽しんで頂ければと思います。何よりも花がよくなければなりません。よく苗屋さんや本などで推奨している品種には、強いだけが取柄で、花そのものには魅力の乏しいものが少な

くありません。苗屋さんとすれば、植えて枯れましたと言われるのが嫌ですから、強かったらいいんです。切り花を生産する人たちがいいとする品種は、蕾が美しく、花もちのよいものがいいのです。値段は何で決まるかと言うと、茎の長さです。したがって花つきがよく、茎の長く育つ品種が有利なわけです。ですからこれらは、私たちの作って楽しもうとするばらとは、全く別でございます。ばらの本も、目についても殆んど買うことはありません。本当に一生懸命ばらに打ち込んでいる人はまず書きませんので、普通の本には一応のことしか書いていません。それに、何よりもばらの写真がいけません。そんな短期間に簡単にいい写真が撮れるわけがありません。いつも同じ栽培をすれば、同じように良い花が咲くものではありません。その年の僅かな気候の差で、全く異質の花が咲きますので、短期間では決してよい写真が撮れるものではないのです。ばらでは、毎年いい花を咲かせられる名人など、あり得るものではありません。

今年の秋には、殆んどいい花を見ることが出来ませんでしたが、これは関西だけのことではなくて、全国的なものでした。この秋、全国のばら人が集まる全国コンテストが大阪であったのですが、何処ともに良花が咲かなかったと見えて、眼を惹くような花は残念ながら出ていませんでした。このように、気候がその品種に合わないと、よくは咲かないんです。できるだけ気候の影響が少なく、しかも春、秋ともによく咲くことも、品種を選ぶ重要条件と考えて下さい。それらを考えて、私の推奨品種を挙げてみますと、十種類か、十二、三種類になりましょうか。まずそ

んなものから始めて、ばらを見る眼を養い、あとはご自分で気に入ったものを集められればよいと思います。

良花を咲かせようと思えば、まずよい花に親しみ、ばらを見る眼を肥やすことです。いいばらとは何かと考えながら、それを目標にして作ればいいと思います。一人よがりでものをやるということでは、何でもそうだと思いますが、なかなか深く味わうことは出来ません。長い間の一人よがりのばら作りから、ばら会に入られますと二、三年もするとお庭のばらがすっかり入れ代るものです。

⑪　年賀状－2

交配による新種作りは諦めましたが、それでも、ここまでに情熱を傾けて来た自分のばら作りに何か意義づけをし、気持の支えになることはないかと考えましたのが、私のばら作りを、ばらの演奏と位置づける事でした。私には音楽のことは分りませんが、音楽を作曲して自分で演奏する人が、本来のすぐれた音楽家だと思います。昔の人はそうでしたね。偉大な音楽家は、自分の作品を自分で演奏して、聴衆を魅了いたしました。今は作曲家と演奏家とには別々に価値が認められています。与えられた曲を、各人が如何に美しく音として表現するかに、演奏家の存在価値があり

ます。ばらの場合も、育種家の価値はいうまでもありませんが、すぐれた栽培家もいなければなりません。どれほどすぐれた品種がありましても、これを、その花の能力一ぱいに咲かせてやる栽培家が居りませんと、これを人の観賞に供することはできませんからね。このような意味で、栽培家というのが必要なんだ、ばらの演奏家として、大きな存在価値のあるものなんだ。こうした理屈といいますか、自分ながらの屁理屈をつけて、この頃は一応ばら作りに安住しているところです。

それと今一つ、ばら作りの歓びとは何かということを最後に申し上げたいと思います。はじめは、いい花が咲いたことによる喜び、やがては、ばら展で入賞する嬉しさ、それに大勢の人に自分の花を見てもらえる嬉しさを味わいました。そのうち、沢山の方々が、ばらを訪ねてお見えになるようになり、皆様が、私の花で楽しまれ、喜んで下さる姿を見せてもらうようになりまして、その方が格段に歓びが大きいということを、ばらに教えてもらいました。白杖のお年寄りの方が、両手でばらの花を抱え、顔をくっつけて、花の形と香りを鑑賞されるお姿を目にし、また、健気に咲いたばらに、やさしく労らいの言葉をかけて下さるお声を耳にする時など、ばら作りの冥利を感じさせていただきます。私のばら作りもばらに教えられた深い歓び、或は心の救いを覚えるところまでに、若干来たような気もいたします。私は無宗教ですが、家内はクリスチャンなものですから、一昨年でしたか、教会の牧師さんが訪ねて来られた時、小一時間も案内しながら、

「私、なかなか宗教に入ることができず、今はまだばら教徒なんです」と申しましたが、別に嫌な顔もせずに、私の話を面白そうに聞いて下さいました。ある程度は、ばらに救われているところもあり、ばらによる功徳と言いますか、そういうものをも感じている次第です。そのうち、何教かに入れていただくことになるかも知れませんが、今のところは、ばら教ということで、ばらを楽しんでおります。余り話が長くなりますので、これ位にして、早速スライドに移らせていただきます。

（映写しましたスライドは、各系統の主要栽培品種、ならびに若干の原種の写真を主に、私の庭に咲く花、ばら展の紹介などをした後、ばらをテーマにした私の年賀状など計八十点ですが、ここではその中の十一点をとり出しました。色がなくて残念ですが、これらの写真に、順次説明を加えさせていただきます。）

① 門から家のテラスの方向を見たものです。前景は各種のフロリバンダ、上はパーゴラに這わせたつるばらのシュネービッチェンです。つるばらを取り入れますと、庭に立体感を出すことができます。

② HT種は、まず白のビルゴから見ていただきます。その名の通り、清純無垢な乙女を思わ

せるばらで、私の庭の三種の神器の一つとして愛培しています。芯のよく締まった典型的な丸弁の花です。同じく白に、タッチ・オブ・ビーナスがあります。咲く花のどれもがよく形が整う上に、この花の持つさわやかで澄んだ芳香がすばらしいのです。他にも強香のばらはありますが、これほど冴えた香りのものは珍しいです。ただし、樹勢が弱く、成育に時間のかかるのが難点です。

③　一般にばらの花形として求められる、所謂高芯剣弁の、正に典型的な花です。何年かに一度、その時の気象条件がこの花に合えば、このような凄い花を咲かせることがあるのです。金黄色のゴルト・クローネと申します。黄色の花は開きの早いのが難点です。

④　ピンクには秀花がたくさんあります。ピンク・ラスター、コンフィダンス、ロイヤル・ハイネスなど、どれも形の整った美しいばらです。中でも、数少ないオランダ生れのばら、ピンク・ラスターは、昭和五十年頃までは、特に私の庭ではよく咲き、これで「ばら作り日本一」になったことも二度ありましたが、近年は全国どこもよく咲かなくなりました。この花の他にも、以前のようなすばらしい花を咲かせなくなったものが少なくないのは何故でしょうか。

しかしピンクの花の中で、私の最愛のばらは、ここにお見せするミシェール・メイアンです。やさしく語りかけて来るようなうすピンクのこのばらは、容を傲らず、色を誇らず、ひそやかに静かに開く、といった高い格調と豊かな知性を具えたばら、とでも申しましょうか。現代ばらの

祖ピースの作出者、F・メイアンが、愛嬢の名をこの花につけたのも尤もだと思います。年々、多くの新花が生れ出ては消えていく中で、長年作れば作るほどに、益々そのよさに魅せられる、このようなばらはまことに貴重です。私は、この花こそが、銘花の中の銘花だと思います。又、新たに八本植えたところです。

⑤ 赤ばらでは、やはりクリスチャン・ディオール、ジョン・ウォーターラー、それにこのレッド・ライオンの三つがすぐれています。それぞれ一長一短があり、春に咲くウォーターラーの色は最高ですが、秋の花が悪く、ディオールは春秋ともに無難、ライオンは、よく咲けばスマートで上品な花なんですけれども、気象条件に敏感で、よく咲く確率が低いのです。これらのことを承知の上で、赤の品種は選ばなければなりません。

赤の濃いのを黒ばらといいます。黒ばらにもいろいろと品種が少なくありませんが、今なおパパ・メイアンに勝るものはありません。株による個性がかなり強いので、色のよく出る親株を吟味することが肝要です。強い香りを持っていますが、その香りは、タッチ・オブ・ビーナスのような澄んだ香りとは異り、甘い、重厚な香りとでも言えましょうか。

⑥ 覆輪花の例として、シルバー・ライニングを示しています。弁端に行くにしたがって、色の濃さが増していく花のことを申します。日が当らないと一般に覆輪の出が弱く、強すぎれば醜く焼けたようになるものもあります。ピースは、クリーム弁にピンクの覆輪の入る花です。黄色

系のばらですから花もちがよくありません。

複色花といいますのは、花弁の表と裏の色の異る花や、絞り模様の弁を持った花のことを申します。表と裏の色の違う二色花は珍しくありませんが、鮮やかな絞り花は余りありません。絞りの花というものは、交配によって生れたものではなく、突然変異で出て来たものですから、作っているうちに、逆に元の親に戻って、折角の絞りが消えることが少なくありません。ただ珍しいだけの花です。

⑦ フロリバンダ（房咲）種の一例です。フロリバンダは、一輪ずつの花よりも、むしろ一茎に咲く花房がよくなければなりません。花数が十分多く、それらの花が、高低なく同一平面に揃って咲かなければ、乱れた姿になります。この写真のキャプリオールは、花も花房も美しいピンクのフロリバンダです。

⑧ ミニばらの一例として、単弁の銀座小町を見ていただきます。五弁の花を普通単弁といっています。最近公園などでよく使われるグランドカバー・ローズと呼ばれる系統のもので、一般のつるばらとは異なり、地面を這って長く伸びるのが特徴です。写真は、鉢に植えてウィーピングに仕立てたものです。

⑨ 原種ばらの中で最高に美しいナニワバラです。これは、樟葉に居ります三高昭和十年卒の兄（今中潤二）の栽培しているものです。一株で、この写真の四、五倍もの巾に拡がっている強

健種ですが、刺が至って鋭く、管理が大変です。それにも拘らず、他のばらより一足早く見せるこのばらのすばらしい景観が捨てきれないのでしょうか、今なお苦労しながら栽培を続けています。

⑩　最後に、私が昭和三十四年から続けてまいりました、ばらを題材にした年賀状を見ていただきます。花ばかりでは面白くありませんので、何かと趣向を凝らしてまいりました。これは美しく見事なマグレディス・イエローの刺をモデルにしたものです。刺も私にとっては観賞対象で、花とともに刺も美しくあってほしいと思います。よく見れば、ばらの刺は皆、下の方を向いていて、ばらに逆らわなければ、決して刺すものでないことをご承知願います。

⑪　ばら栽培のカレンダーです。説明の要はないと思いますが、六、七月はカミキリと病気の発生しやすい月、十月は全国コンテストの月です。肝心の五月の花がまずくて残念です。

これで私の話を終らせていただきます。一人よがりの話で、私が楽しませていただき、まことにありがとうございました。花の季節には、ご遠慮なくお訪ね下さいますようお待ちいたしております。

（大阪大学名誉教授）